治水をめぐる信仰と民俗

災害民俗学の思想と方法

畑中章宏（民俗学者・作家）

水を治め、災害に際しては防災と減災をめざして、私たちの先人はどのような営みを続けてきたのか。

水神を祀って日乞いや雨乞いを願い、さまざまな神仏に祈りを捧げた。

また大水害の経験を伝承化するなどして、記憶の継承につとめてきた。

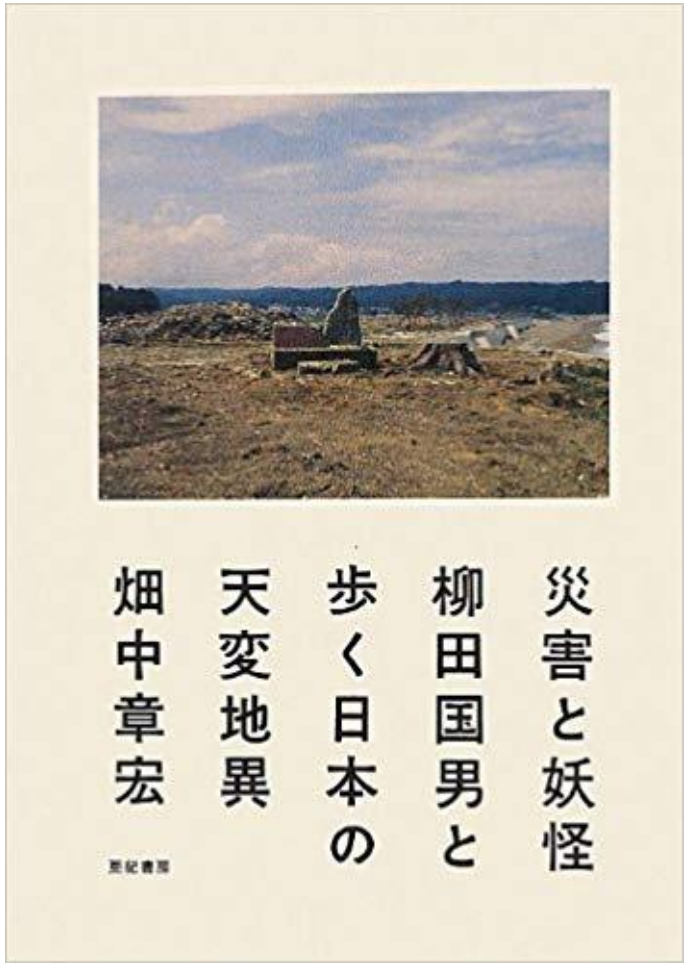
天災は人智によって防ぐことはできないものの、減災の努力を積み重ねてきた。

近代的で堅固な構造物とは異なる、“軟らかで”民俗工学的ともいえる工夫を凝らしてきたのである。

民俗社会の叡智を現在につなげるには、私たちはそれをどのように受け止め、取り入れることができるだろう。

民俗学の多大な成果から災害伝承や減災遺産を抽出し、現代との接点を模索する「災害民俗学」の思想と方法を紹介する。

『災害と妖怪』



『天災と日本人』

新海誠監督『天気の子』（2019年）

高１の夏。離島から家出し、東京にやってきた森嶋帆高（ほだか）。

しかし生活はすぐに困窮し、孤独な日々の果てにようやく見つけた仕事は、怪しげなオカルト雑誌のライター業だった。

彼のこれからを示唆するかのように、連日降り続ける雨。
そんな中、雑踏ひしめく都会の片隅で、帆高は一人の少女に出会う。

ある事情を抱え、弟とふたりで明るくたくましく暮らすその少女・天野陽菜（あまの・ひな）。
彼女には、不思議な能力があった。

掃晴娘（さおちんにゃん／そうせいじょう）

昔、北京に晴娘（ちんにゃん）という名前の美しくて賢い娘がいた。晴娘は手先が大変器用で、切り紙が得意だった。

ある年の6月に北京を大雨が襲い、町に水があふれかえった。人々は雨が止むように祈願をし、晴娘も天に向かって祈りを捧げた。

すると「東海龍王の妃になれば、雨を止めてやる」という天の声が聞こえ、晴娘がその命に従うと、雨は止み、晴娘は天に召されて消えてしまった。

以来、北京では雨が降り続くと、町を大雨から救った晴娘をしのび、切り紙で作った人形を門にかけるようになったそうです

「災害民俗学」がめざしていること

防災・減災のために先人が努力してきた「民俗的叡智」を探る。

新しい「伝承」の方法、記憶の「継承」の仕方を模索する。

鎮魂・供養・追悼の今日的なありかたを考える。

「民俗的叡智」を活かす社会の仕組みを考える。

治水をめぐる信仰=水神信仰

日照りが続くと作物の実りが悪くなり、大雨や長雨は河川の氾濫を呼び起こす。そんな状態がいつまでも続くときに、人々は、「雨乞い」や「日乞い」をした。

雨乞いは雨が降るのを祈ること。

日乞いは雨が止み、空が晴れるのを祈ることで、「照り乞い」や「晴乞い」、「雨止め」や「雨上げ」などともいった。

「オカミ」と「ミヅハ」

『古事記』では、伊邪那岐（イザナギ）神が火の神迦具土（カグツチ）の首を斬ったとき、剣の柄に集まった血が手の指の股から洩れ出て、「闇淤加美（クラオカミ）神」と「闇御津羽（クラミヅハ）神」の二神が生まれた。

『日本書紀』によると、イザナギに斬られたカグツチは三つに分かれ、雷神と大山祇神と高龗（タカオカミ）になったとされる。「クラオカミ」の「クラ」は谷を、「オカミ」は龍神を意味し、「タカオカミ」は山上の龍神だとされている。

「貴船神社」（京都市左京区）

祭神=「高龗（たかおかみ）神」

平安時代中期に編纂された『延喜式』の「神名帳」には「山城国愛宕郡 貴布禰神社」と記され、「祈雨八十五座」のひとつ

貴船神社では、高龗神は闇龗神と同じ神で、「降雨・止雨を司る龍神で、雲を呼び、雨を降らせ、陽を招き、降った雨を地中に蓄えさせて、それを少しずつ適量に湧き出させる働きを司る神」だとしている。

歴代の天皇が数百回にわたって、雨乞い、雨止めの祈願に生馬を捧げてきたという。

生馬献上の習俗

雨乞いや日乞いを祈願するときに、牛や馬が神に捧げられた。

民俗学者の柳田国男

「白き馬は神の最も好む物なりしこと、旧日本においても多くの例あり」

『常陸国風土記』によると、崇神天皇の時代に、鹿嶋大明神に馬一頭を奉ったとあることから、古代には、「生馬」を献上する風習があったことがうかがわれる。

『続日本紀』（797年編纂）

宝亀元年（770）8月、日蝕のとき中臣朝臣宿奈麻呂を伊勢神宮に遣し、赤毛の馬二頭を奉納させたとある。赤毛の馬が神に捧げられたのは、赤色が火の色を想わせ、太陽の衰弱の回復させるための、類似の原理に基づく「模倣呪術」だったとみられる。

治水神話

『日本書紀』仁徳天皇11年10月の記事に、

「天皇は、北の河の澇（こみ）を防がむとして茨田堤を築く（天皇は洪水や高潮を防ぐことを目的として、淀川に茨田堤を築いた）」

との記述があり、茨田堤の成立を物語るものとされている。

茨田堤（まんだのつつみ）

冬十月。宮の北の野原を掘って南の河（旧大和川）を西の海（大阪湾）に通した。これを堀江大阪市内を東西に横切る大川＝旧淀川の原形）という。

また、北の河（淀川）の泥を防ぐために茨田堤を築造した。

この時、二箇所ほど築造に難航した堤防があった。

天皇は神託を受け、武蔵の強頸（こわくび）と河内の茨田連衫子（まんだのむらじころもこ）の2人を人身御供として河の神に奉げることにした。

強頸は泣きながら水に入って死に、その堤防は完成した。

衫子は死なず、堤防も完成した。

それらの堤防は「強頸断間（絶間）」「衫子断間（絶間）」と名づけられた。

「民俗学」とは

・有形文化：住居、衣服、食制、労働、誕生、婚姻、葬制、年中行事、神祭…

・言語芸術：命名、言葉、諺・謎、民謡、語り物、昔話、伝説…

・心意現象：妖怪・幽霊、兆・占・禁・呪…

「災害民俗学」とは

・有形文化：（例）水塚、畳堤、上げ舟、津波碑、十一面観音…

・言語芸術：（例）白髭水、やろか水、災害地名…

・心意現象：（例）河童、天狗、鯰…

三つ領域は明確に分けることができるものではない。

災害民俗の「有形文化」
荒川流域の「水塚」　（埼玉県志木市）

災害民俗の「有形文化」
越後平野の「水倉」（新潟県新潟市）

災害民俗の「有形文化」
淀川流域の「段蔵」（大阪府高槻市）

災害民俗の「有形文化」
強頸絶間の「段蔵」と跡地（大阪市旭区）

災害民俗の「有形文化」
杉子絶間の「段蔵」と茨田堤碑（寝屋川市太間）

災害民俗の「有形文化」
上げ舟（埼玉県志木市）

平成26年8月豪雨による広島市の土砂災害

・広島市では、8月20日の未明に斜面崩壊と土石流が発生。
（死者74人）

・広島市安佐南区八木地区、緑井地区
太田川右岸の阿武山（標高586m）の山腹で斜面崩壊が発生。
渓流を流れ下り、渓流の出口にあった家屋を襲った。

・「八木蛇落地悪谷」→「八木上楽地芦谷」→「八木」？

蛇落地観音堂（広島県安佐南区八木）

「弘化4年（1847）10月に阿武山の山頂から降ろされた2体の観音木像がある」
（『佐東町史』）

災害民俗の「心意現象」／「有形文化」／「言語芸術」
蛇落地観世音（広島市安佐南区）

蛇落地観音堂

蛇落地観音像の頭部

災害地名伝承「蛇崩」

目黒川と蛇崩川の合流地点

蛇崩橋

災害民俗の「言語芸術」／「有形文化」
「やろか水」（入鹿切れ流れ石：愛知県犬山市）

「やろか水」

吉野神社（愛知県犬山市）

馬頭観音（愛知県江南市）

やろか水

大雨の降り続いていた頃の真夜中に、対岸の何とか淵のあたりから、しきりに「遣（や）ろうか遣ろうか」という声がする。

土地の者は一同に気味悪がって黙っていたのに、たった一人が何と思ったか、「いこざばいこせ」と返事をしたところが、流れは急に増して来て、見る間に一帯の低地を海にした。

（柳田国男『妖怪談義』）

→流域型洪水？

災害民俗の「言語芸術」／「心意現象」／「有形文化」
「うなぎ絵馬」（彦倉虚空蔵尊・延命院：埼玉県三郷市）

「うなぎと虚空蔵菩薩」

「秋の大雨が数日つづき、古利根川（中川）が増水し堤防が決壊、みるみるうちに床上まで浸水し、ついには軒先まできてしまった。

方々から“助けてくれぇ”という叫び声がきこえ小船を漕ぎだして探していると、子供や老人が太い丸太のようなものに乗ったりつかまったりして、流れのはやい濁流の中で流されずに浮いていた。

よくみればそれは丸太ではなくうなぎの大群で、縄のようになってより集まり、子供や老人の体が流されないように抑えつけて多くのひとの命を救った。

これらのひとは、その恩返しのためにうなぎを一切口にしないと誓ったという。」

「九州の河童」

九州のは群をなしていて、一匹で独立しているのはない。

極端な場合には馬の足型だけの水溜りがあれば千匹もいるなどということまでいう。

とにかく狭い所に群をなしているものらしい。

（柳田国男「河童考」）

災害伝承（津波）

通り池

帯岩

「ヨナタマ」

昔、伊良部島の下地村の男が、人面魚体の「ヨナタマ」という魚を釣った。漁師はあまりに珍しいものだから、翌日みんなに見せようと思って、炭をおこして魚を炙って乾かしていた。

その夜遅く、隣りの家に母親と泊っていた子どもが急に大声で泣き出し、「伊良部村へ帰りたい」と言う。「夜中だから」と母親がなだめすかしても泣きやまないので、母親は仕方なく子どもを抱いて外に出ると、強く抱きついてわななきふるえる。母親が怪しく思っていると、遠い沖のほうから、

「ヨナタマ、ヨナタマ、どうして帰りが遅いのか」という声が聞こえてきた。すると隣家に干されていたヨナタマが、

「いま炭火の上にのせられて半夜も炙り乾かされている。早く迎えをよこしてくれ」と答えた。

これを聞いた母子は恐ろしくなり、急いで伊良部村に帰った。翌朝、下地村へ戻ってみると、村中残らず大津波にのまれて跡形もなく洗いつくされていたという。

（柳田国男「物言う魚」要約）

災害伝承（風害）

風の三郎神社

風切りの松

災害伝承（噴火）

鎌原観音堂

延命寺跡

災害民俗学と「感情」

・喜怒哀楽では“割り切れない“

・民間伝承は“腑に落ちない“

・近代的・西欧的ではない「合理化」

→「災害伝承」の保存と活用、体系化が必要。